謡曲「綾鼓」と「恋重荷」について

前田正民

能楽現行曲中に、綾鼓と恋重荷とがある。趣向を同じうしているもので、どちらも身分の賤しい老人が女御を恋慕し、目的を達し得ないで死んだというものである。綾鼓は、宝生流と金剛流とで行われ、恋重荷は、観世流で行われ、重い習い物となっている。

先ず本文を記す。

綾　鼓

宝生流、金剛流共に詞章に異同がないが、現行宝生流のものを掲げる。但し謡い方の記号は殆んど省いた。又シテワキなどと狂言との問答の処は、宝生流謡本では狂言の部分はシカ〳〵と記して狂言の詞は記してない。時にはシカ〳〵の記入もない処がある。その部分は便宜上、佐成氏の謡曲大観に記されているところを、文句だけ挿入する。△と○との部分がそれである。本文の仮名遣や宛字などは謡本のままにしておく。句読点は私が適宜つけたものである。

ワキ〳〵是は筑前の国木の丸の皇居に仕へ奉る臣下にて候。偖も此所に桂の池とて名池の候に、常は御遊の御座候。ここに御庭掃の老人の候が、女御の御姿を見参らせ、しづ心なき恋となりて候。此事を聞し召し及ばれ、恋には上下をわかぬ習ひなれば、不便に思し召さるる間、彼の池の辺りの桂木の枝に鼓を掛け、老人に打たせられ、彼の鼓の声皇居に聞えば、其時女御の御姿を見え給はんとの御事にて候程に、彼の老人を召して申し聞かせばやと存じ候。いかに誰かある。シカ〳〵△ 畏マリ〳〵御前に候。○ ワキ〳〵いつもの御庭掃の老人に、急いで参れと申し候へ。シカ〳〵△ 畏マリ〳〵畏つて候。いかに庭掃の老人。御召にて候間とうとう参られ候へ。○ ワキ〳〵如何に老人。汝が恋の事を忝くも聞し召し及ばれ、不便に思し召さるる間、桂の池の桂木の枝に掛け置かれたる鼓を、老人参りて打ち候へ。彼の鼓の声皇居に聞えば、今一度女御の御姿を見えさせ給はんとの御事なり。急ぎ参りて鼓を仕り候へ レテ〳〵仰せ畏つて承り候。さらば参りて鼓を仕り候べし ワキ〳〵此方へ来り候へ。此鼓の事にてあるぞ急いで仕り候へ レテ〳〵げにや承り及ぶ月宮の月の桂こそ、名に立てる桂木なれ。これは正しき池辺の枝に、かかる鼓の声出でば、それこそ恋の東ねなれと、夕べの鐘の声そへて、又打ちそふる日なみの数 地次第〳〵後の暮ぞと頼め置く、後の暮ぞと頼め置く、時の鼓を打たうよ。 シテ一セイ〳〵さなきだに、閨の夜鶴の老の身に 地〳〵思ひをそふるはかなさよ シテ〳〵時の移るも白波の 地〳〵鼓はなにとてならざらん シテサシ〳〵後の世の近くなるをば驚かで、老にそへたる恋慕の秋 地〳〵露も涙もそぼちつつ、心からなる花の雫の、草の袂に

色そへて、何を忍ぶの乱れ恋。忘れんと思ふ心こそ、忘れぬよりは思ひなれ。クセ〳〵然るに世の中は、人間万事塞翁が馬なれや。隙行く日数うつるなる、年去り時は来れども、遂に行くべき道芝の、露の命の限りをば、誰に問はまし、あぢきなや。などされば これ程に、知らばさのみに迷ふらん レヅ〳〵驚けとてや東雲の 地〳〵眠りを覚ます時守の、打つや鼓の数しげく、音に立たば待つ人の、面影もしや御衣(みけし)の、綾の鼓とは知らずして、老の衣手力そへて、打てども聞えぬは、もしも老耳の故やらんと、聞けども聞けども、池の波窓の雨。いづれ打つ音はすれども、音せぬ物は此鼓の、怪しの太鼓や、何とて音は出でぬぞ 地ロンキ〳〵思ひやうちも忘るると、綾の鼓の音も我も、出でぬを人や待つらん レヅ〳〵出でもせぬ雨夜の月を待ちかぬる、心の間を晴すべき、時の鼓も鳴らばこそ 地〳〵時の鼓の移る日の、昨日今日とは思へども、レヅ〳〵頼めし人は夢にだに 地〳〵見えぬ思ひに明け暮れの レヅ〳〵鼓もならず 地〳〵人も見えず。こは何となる神も、思ふ中をばさけぬとこそ聞きし物をなどされば、かほどに縁なかるらんと、身を恨み人をかこち、かくては何のため、生けらんものを池水に、身を投げて失せにけり。憂き身を投げて失せにけり。（中入）

△ 狂言〳〵扨も〳〵あはれなる事かな。唯今の老人は、鼓の鳴らぬ事を歎き、身を投げ空しくなりて候。誠にいつの頃にか桂の池へ行幸の折節、女御を見奉りしづ心なき恋となりて候を、この事を聞し召し及ばされ、恋は上下に限らぬものなればとて、不便に思し召し、池の辺の桂の木に、綾にて鼓を張り掛け置き給ひ、その鼓を打ち鳴らすならば、恋を御叶へあるべきとの御事にて候間、ありがたく思ひ、鼓を打ち候へども、更に音は出で申さず候。常の鼓さへ打ちつけぬ者が打てばとて鳴らぬものにて候。況んや綾にて張りたる鼓ならば、ここをせんどと打ち申し候へども、鳴り申さず候により、この上は命ありとても詮なしとて、池へ身を投げ空しくなり申して候。誠に老人の心中思ひやられ、われ等も涙を流して候。よくよく思へば、綾の鼓は鳴らぬものにて候が、老人の及ばぬ恋を留めさせらるべきとの御謀にて候べし。いや独言を申さずとも、老人の空しくなりたる由申し上げばやと存ずる。いかに申し候。御庭掃の老人、鼓の鳴らぬ事を歎き、桂の池へ身を投げ空しくなり申して候 ワキ〳〵なにとかの老人鼓の鳴らぬ事を歎き、桂の池へ身を投げたると申すか 狂言〳〵なか〳〵の事急いで御覧候へ ワキ〳〵さらばその由申さうずるにて候。○ ワキ〳〵いかに申しげ候。彼の老人鼓の鳴らぬ事を恨み、桂の池に身を投げ空しくなりて候。かやうの者の執心も余りに恐ろしう候へば、そと御出であつて御覧ぜられ候へ ツレ〳〵如何に人々聞くかさて、あの浪の打つ音が、鼓の声に似たるは如何に。あら面白の鼓の声や。あらおもしろや ワキ〳〵不思議やな女御の御姿。さも現なく見え給ふは、いかなる事にてあるやらん ツレ〳〵現なきこそ理りなれ。綾の鼓は鳴るものか。鳴らぬを打てと言ひし事は、我が現なき始めなれと ワキ〳〵夕波さわぐ池の面に ツレ〳〵猪打ちそふる ワキ〳〵声ありて 後シテ〳〵池水の、藻屑となりし老の浪 地「又

立ち帰る執心の恨み シテ〻恨みとも歎きとも、いへば中々愚かなる地〻一念瞋恚の邪婬の恨み。晴れまじや、晴れまじや心の雲水の、魔境の鬼と今ぞなる シテ〻小山田の苗代水は絶えずとも、心の池の言ひは放さじとこそ思ひしに、などしもされば情なく、鳴らぬ鼓の声立てよとは、心を尽し果よとや。心づくしの木の間の月の 地〻桂にかけたる綾の鼓 シテ〻鳴るものか、鳴るものか。打ちて見給へ 地〻打てや打てやとせめ鼓、よせ拍子。とうとう打ち給へ、打ち給へとて、しもとを振り上げ、責め奉れば、鼓は鳴らで、悲しや悲しやと、叫びます女御の御声。あらさてこりや、偖こりや。冥途のぜつき、阿房羅刹。冥途のぜつき阿房羅刹の、呵責もかくやらんと、身を責め骨を砕く。火車の責めと云ふとも、これにはまさらじ恐ろしや。さて何となるべき因果ぞや シテ〻因果歴然は目のあたり 地〻歴然は目のあたり、知られたり白波の、池の辺りの桂木に掛けし鼓の時もわかず、打ち弱り心つきて、池水に身を投げて、波の藻屑と沈みし身の、程もなく死霊となって、女御につき祟つて、しもとも波も、打ちたたく池の氷の東頭は、風渡り雨落ちて、紅蓮大紅蓮となつて、身の毛もよだつ波の上に、鯉魚が躍る。悪蛇となつて、まことは冥途の鬼といふとも、かくやと思ひ白波のあら恨めしや恨めしや。あら恨めしや、恨めしの女御やとて、恋の淵にぞ入りにける。

恋重荷

前にも記したように、この曲は重い習い物で、普通の謡本には謡い方や、文字に濁点がついていないので、全文謡曲大観によって記す。

ワキ〻抑もこれは白河の院に仕へ奉る臣下なり。さてもわが君菊を御寵愛あつて。毎年数多の菊を植ゑ育てられ候。又ここに山科の荘司とて賤しき者の候。いつも菊の下葉を取らせられ候間。申しつけばやと存じ候。又承り候へば。かの者如何なる折にか。忝くも女御の御姿を拝み申し。勿体なくも恋となりたる由承り候間。かの者を召し出だし尋ねばやと存じ候。

ワキ〻いかに誰かある 狂言〻御前に候 ワキ〻山科の荘司に此方へ来れと申し候へ 狂言〻畏つて候。いかに山科の荘司の渡り候か シテ〻誰にて渡り候ぞ 狂言〻急ぎ御参りあれとの御事にて候 シテ〻畏つて候△ 狂言〻荘司を連れて参りて候 ワキ〻過分にて候。○

ワキ〻いかに荘司。何とてこの間は御庭をば清めぬぞ シテ〻さん候この程所労仕り候ひて。さて怠り申して候 ワキ〻尤もにて候。さて汝は恋をするといふは真か シテ〻さやうの事をば何とて知ろしめされて候ぞ ワキ〻いやいやはや色に出でてあるぞとよ。さる間この事を忝くも女御聞し召し及ばれ。急ぎこの荷を持ちて御庭を百度千度廻るならば。その間に御姿を拝ませ給ふべきとの御事なり。なんぼうありがたき御諚にてはなきか シテ〻何とこの事を聞しめし及ばれ。その荷を持ちて御庭を百度千度まはれとかや。百度千度とは。百度も千度も持ちて廻らば。その間に御姿を拝まれさせ給ふべきと候や ワキ〻げによく心得てあるぞ。なんぼうありがたき御事にては

なきか　レチ〳〵さらばその荷を御見せ候へ　ッキ〳〵此方へ来り候へ

ッキ〳〵これこそ恋の重荷よ。なんぼう美しき荷にてはなきか　レチ〳〵げにげに美しき荷にて候。たとひ叶はぬ業なりとも。仰せならばさこそあるべけれ。ましてやこれは賤しき業。さのみは隔てじ名を聞くも　地次第〳〵重荷なりとも逢ふまでの。重荷なりとも逢ふまでの。恋の持夫にならうよ　レチ一同〳〵誰踏み初めて恋の道　地〳〵巷に人の迷ふらん　レチ〳〵名もことわりや恋の重荷　地〳〵げに持ちかぬる。この身かな　レチサシ〳〵それ及び難きは高き山。思ひの深きはわたづみの如し　地〳〵いづれ以てたやすからんや。げに心さへ軽き身の。塵の浮世にながらへて。よしなく物を思ふかな　地ロンチ〳〵思ひや少し慰むと。露のかごとを夕顔の。たそかれ時もはや過ぎぬ。恋の重荷を持つやらん　レチ〳〵重くとも。思ひは捨てじ唐国の。虎と思へば石にだに。立つ矢のあるぞかし。いかにも軽く持たうよ　地〳〵持つや荷前の運ぶなる。心ぞ君がためを知る。重くとも心添へて持てや持てや下人　レチ〳〵よしとても。よしとても。この身は軽し徒らに。恋の奴になり果てて。亡き世なりと衰からじ　地〳〵亡き世になすもよしなやな。げには命ぞ唯頼め　レチ〳〵しめぢが腹立ちや　地〳〵よしなき恋を嘗嶮。臥して見れども寝られればこそ。苦しや独寝の。わが手枕の肩かへて。持てども。持たれぬそも恋は何の重荷ぞ　レチ〳〵あはれてふ。言だになくは何をさて。恋の乱れの。束ね緒も絶え果てぬ　地〳〵よしや恋ひ死なん。報はばそれぞ人心。乱れ恋になして思ひ知らせ申さん（中入）

△　狂言〳〵扨も〳〵唯今荘司の心中思ひやられ。誠に不便なる事にて候。女御を恋ひ奉る事。賤しき身にて及びなき事とは申しながら。この道に限り昔より高下の隔てなく。或は雲の上人を恋ひわび。その身を果し又遁世など致し。我を失うたる例その数多し。それは聞き伝へたるばかりなるが。今の荘司は女御を恋ひ奉り。重荷を得持たずして。立ちどころに空しくなる事。古より恋ひわびたる人々の事をも。今見るやうに存じ。涙を浮かめて候。もとより恋の思ひのと申すは。色々様々に身をやつし。その身の衰ふる事も知らず。人目を恥づる事もなきと申すが。荘司もこの程は明けても暮れても女御の御事のみ思ひ。菊畑のお掃除をも致さず。今日御召にて。重荷を持つならば女御の御姿を今一度見え給はんとあれば。荘司ありがたく思ひ。やがて重荷を持たんとするに。たやすく動かねば。愈〻精力を尽し。尤もこの程の疲れにや。空しくなり申して候。いや独言を申さずとも。荘司が空しくなりたる由申さばやと存ずる。

狂言〳〵いかに申し候。山科の荘司重荷を持ちかね。色々恨み事を申し。終に空しくなり申して候。ッキ〳〵何と荘司が空しくなりたると申すか△　狂言〳〵なか〳〵空しくなり申して候。ッキ〳〵言語道断近頃不便なる事にて候ぞや。総じて恋と申す事は。高き賤しき隔てぬ事にて候へどもさりながら。かの者の恋の心を止めんとの御方便にて。重荷を作つて上を綾羅錦繡を以て美しく包みて。いかにも軽げに見せて持たせなば。かの者思はんには。かほど軽げなる荷なれども。恋の叶ふまじき故に持たれぬぞと心得。恋の心や止まるべきとの御

事にて候処に。賤しき者の悲しさは。これを持ち御庭を廻らば。御姿を見えさせ給はん事を悦び。精力を尽し候へども。もとより重荷なれば持たれぬ事を恨み。歎きてかやうに身を失ひ候事。返す返すも不便にこそ候へ。この由を申し上げうずるにて候 ッャ〳〵いかに申し上げ候。山科の荘司重荷を持ちかねて。御庭にて空しくなりて候。かやうの賤しき者の一念は恐ろしく候。何か苦しう候べき。そと御出であつて。かの者の姿を一目御覧ぜられ候へ ッレ〳〵恋よ恋。わが中空になすな恋。恋には人の。死なぬものかは。無慈の者の心やな ッャ〳〵これは余りに忝き御諚にて候。はやはや立たせおはしませ ッレ〳〵いや立たんとすれば磐石に押されて。更に立つべきやうもなし 地〳〵報いは常の世の習ひ 後ジテ〳〵吉野川岩切り通し行く水の。音には立てじ恋ひ死にし。一念無量の鬼となるも。唯よしなや誠なき。言寄せ妻の空頼め 地〳〵げにもよしなき心かな。浮寝のみ。三世の契りの満ちてこそ。石の上にも坐すといふに。われはよしなや逢ひ難き。嚴の重荷持たるるものか。あら。恨めしや。葛の葉の レヲ〳〵玉襷畝傍の山の山守も 地〳〵さのみ重荷は。持たればこそ レヲ〳〵重荷といふも。思ひなり 地〳〵浅間の煙。あさましの身や。衆合地獄の重き苦しみ。さて慈り給へや慈り給へ 地〳〵思ひの煙立ち別れ。思ひの煙立ち別れ。稲葉の山風吹き乱れ。恋路の闇に迷ふとも。跡弔はばその恨みは霜か雪か霰か。終には跡も消えぬべしや。これまでぞ姫小松の。葉守の神となりて千代の影を、守らんや千代の影をも守らん

この二曲の作者について検討して見ることとする。

能本作者註文には、世阿弥作の曲目中に「綾鼓」「恋重荷」共に掲げてあるが、二百十番謡目録には、習十番之部に「恋重荷」元清作と出ていて綾鼓は挙げてない。

川瀬一馬博士の世阿弥二十三部集によって恋重荷の文字の見えている処を摘記すると次の通りである。

能作書条〻

一、おほよそ、三躰の能、近来、押し出だして見えつる世上の風躰の数〻。

八幡・相生・養老・老松・塩釜・蟻通、如レ此老躰数〻。

箱崎・鵜羽・盲打・静・松風村雨・百万・浮舟・桧垣の女・小町、如此女躰。

通盛・薩摩守・実盛・頼政・清経・敦盛、如レ此平躰。

丹後物狂・自然居士・高野・逢坂、如レ此遊狂。

恋の重荷・佐野の船橋・四位の少将・泰山府君、如此砕動風。

此の能どもをもて新作の本躰とすべし。凡そ近代作書する所の数〻も、古風躰を少し模し取りたる新風なり。昔の蟻蟻物狂の狂女、今の百万これなり。静、木風有り。丹後物狂、昔笛物狂なり。松風村雨、昔汐汲なり。恋の重荷、昔綾の太鼓なり。（中略）其の当世〻〻によりて、少〻言葉を変へ、曲を改めて、年〻去来の花種をなせり。（一二二頁一二三頁）

五音

恋ノ重荷それ及び雛きは高き山（二〇四頁）

世子六十以後申楽談儀

恋の重荷の能に、「思ひの煙の立ち別れ」は、静に渡る拍子の懸りなるべし。此の能は、色ある桜に、柳の乱たる様にすべし。（二八三頁）

八幡　相生　養老　老松　塩釜　蟻通　箱崎　鵜羽　盲打　松風村雨　百万　桧垣の女　薩摩の守　実盛　頼政　清経　敦盛　高野逢坂　恋の重荷　佐野の船橋　泰山府君

これ以上、世子作。（三一八頁三一九頁）

此の座に、年寄りたる尉、龍右衛門、恋の重荷の面とて、名誉せし笑尉は、夜叉が作なり。（三三七頁三三八頁）―以上世阿弥二十三部集

丸岡桂著の古今謡曲解題には、

恋重荷の項に、別名　おもに　として、内容を略記し、「備考」に「歌舞慣脳記」にも記録あり。「世子六十以後申楽談儀に、恋の重荷の能に「おもひのけぶりの立わかれ」は静に渡る拍子のかゝり成べし。此能は色ある桜に柳の乱れたるやうにすべし」など見ゆ又「能作書」には「恋の重荷、昔の綾の太鼓也」と見えたれば、綾太鼓といへる古曲を原として作りしことを窺ふべし。「談儀」「能本作者註文」「二百十番謡目録」皆世阿弥の作とせり。

綾鼓の項には、内容略記の後の「備考」に、恋重荷と同趣向なり。恋重荷の原作なる綾太鼓を改作したるものなるべし。「能本作者註文」に世阿弥作。

とし、「記録に存する不明の曲」として「綾の太鼓」を挙げて、○「世子六十以後申楽談儀」に「恋の重荷、昔の綾太鼓也」とあり。恋の重荷、綾鼓などゝ似通ひたるものにて、それらより古き曲なるべし。

と書かれている。

謡曲大観　綾鼓　の項に「作者」能本作者註文に世阿弥作とす。世阿弥の能作書に、「恋の重荷、昔の綾の太鼓也」といつてゐる。その「綾の太鼓」を改作したものであらう。

恋重荷　の項に「作者」世子六十以後申楽談儀、能本作者註文、二百十番謡目録共に世阿弥の作としてゐるが、世阿弥の能作書に「恋の重荷昔綾の太鼓也」と記してゐるから、古曲を世阿弥が改作したのである。申楽談儀にはまた恋の重荷の能に、「思の煙の立ち別れ」は静に渡る拍子のかゝりなるべし。此能は色ある桜に柳の乱れたるやうにすべし。といつてゐる。

とある。

野上豊一郎氏の謡曲全集には次の如く記されている。

綾鼓　作者　世阿弥元清（「能本作者註文」）と云はれる。（世阿弥自ら「能作書」に「恋の重荷」昔の「綾の太鼓」なりと書いてゐる。「綾の太鼓」を改作して「恋重荷」としたが、その旧作が採用され、また改作されて「綾の鼓」として残つたのであらう）。

恋重荷　作者　世阿弥元清（「申楽談義」「能本作者註文」「二

百十番謡目録」)。但、此の曲の構想は後花園院の御作を世阿弥に賜はつたものと伝へられてゐる。なお出典の処に、世阿弥が「能作書」に記してあるやうに昔の「綾の太鼓」を改作したものである。

以上の諸書は、どれも同様の記事になっているが、能勢朝次氏の能楽源流考に注目すべきことが記されている。同書「謡曲作者考」の部に、

綾の鼓　能作書に、古曲改作のことをのべた条に「恋重荷、昔綾の太鼓なり」とあつて、此の曲が恋重荷の原作であることをのべてゐるが、綾鼓の作者については述べてゐない。能本作者註文・古歌謡作者考・自家伝抄は共に世阿弥作と記してゐる。「昔綾の太鼓なり」とあるから、世阿弥と考へてはをかしいやうであるが、百万の原作の蜆餓物狂や、松風村雨の原作の塩汲、丹後物狂の原作笛物狂なども何れも昔といはれて居る所から、この昔は、以前はといふ程の意と考へて良からう。他に作者についての異説も無いやうであるし、曲柄や詞章から考へてもさして拙い作でなく、世阿弥と考へて差支ないやうであるから、世阿弥作と考へて置き度い。

恋重荷　此曲は綾の太鼓を世阿弥が改作したものである由が申楽談儀に記され、五音にも曲附者名を省いて居るので、世阿弥作たる事は明瞭である。書上・謡目録・作者註文・作書考・異本謡曲作者・自家伝抄、何れも世阿弥作と記して居る。

とある。

如上によれば、恋重荷は世阿弥作ということには殆ど問題はないが、綾鼓の作者については、能本作者註文だけが主な拠所にされている。能勢氏の書かれているところを見ると、綾の太鼓を綾鼓と同一視されているように思われるが、一寸曖昧な点がある。「昔は以前はといふ程の意と考へて良からう。……世阿弥と考へて差支ないやうである。」という言い方は、「綾の太鼓は世阿弥作と考えて差支ないようである。」ということになり、綾の太鼓は綾鼓と同じと見るとはっきり書かれていない。しかし綾鼓の項の説明だから、綾の太鼓は綾鼓と同一と見てよいという意に解せられる。

ここで私見を述べることにする。

能勢氏の言われた、「昔は以前はといふ程の意と考へて良からう。」ということは、改めていうまでもなく、伊勢物語の、月やあらぬ春や昔の春ならぬの歌など去年をさして言っている。こういう例はいくらもある。昨日は今日の昔とまで言われるのであるから、少し古い場合を昔ということに問題はないと思う。次に太鼓と鼓ということについて言って見る。元来太鼓と鼓とは異物である。世阿弥の習道書中にも次のように書かれている。

一、鼓の役人の心得べき事。

既に打ち立てて、未だ為手の、一声・指事をも言ひ出ださぬまでは、我力なれば、何とも一心の得てに任せて、せいひやう・音力の手数を尽して、囃し立つべし。さて次第次第、舞歌二曲・物真似に至りては、私あるべからず。為手の心を受けて、二曲を博士にて、事をなすべし、これ申楽鼓の道なるべし。太鼓なんども、同じ心な

るべし。凡そ何の太鼓なりとも。打ち立ては、乱声なるべし。

世阿弥自身鼓と太鼓とはっきりと区別していることがわかる。世阿弥の作ではないが、能楽の「鳥追舟」の中にも「鼓太鼓打ち連れてなほもいざや追はうよ」と、鼓と太鼓を並べて記している。同じ鳥追舟の中に、「あれあれ見よやよその舟にも打つ鼓打つ鼓。空に鳴子の群雀、追ふ声を立て添へ、さていつも太鼓はとうとうと、風の打つや夕波の」の文句があり、ここは鼓と太鼓を軽く同様に扱っているようである。

大体広い意味において、太鼓も鼓の一種であって、時の鼓というのも太鼓のことであろう。能楽の曲中に「籠太鼓」があり、その詞章中に「あれこそ時守の時を知る相図の鼓よ」とあり、その他の所も「鼓」とだけ書かれて、「太鼓」という文字はない。尤も同曲中アヒの狂言の詞は、「太鼓を打つて」とか「太鼓を釣らう」などとなっていて、能では「羯鼓」を取りつけることになっている。

結局、鼓と太鼓は区別がありながら、時には殆ど同様な気持で使われたのでなかろうか。現に、綾鼓の詞章中にも、「音せぬ物は此鼓の、怪しの太鼓や、何とて音は出でぬぞ」の句がある。ここは「太鼓や」でなく「鼓や」でもよい所である。

世阿弥が「恋の重荷、昔綾の太鼓なり。」と著作中一箇所だけ記していることは、綾の太鼓を作ったものの、内容が、女御という尊貴な方に、賤夫の執念がつきたたるなどして恨み死ににしたことに気が咎め、また世阿弥の作能に対し、演技上のことながら、物学条々「鬼」の処に、「真の冥途の鬼よく学べば、恐しき間、面白き所更になし。」「ただ鬼の面白からむ嗜み、厳に花の咲かんが如し。」などと言っているところから見ても、余りに激烈であるので、恋重荷に改作してから、旧作の綾の太鼓には関心がなくなっているからでなかろうかとも考えられる。

以上の点から推して私は綾の太鼓と綾鼓とは同一のものと断じたい。

次に綾鼓と恋重荷について批判を試みることとする。

先ず、佐成氏は謡曲大観の恋重荷の項で次の通り記されている。

本曲は前に述べたやうに、古曲〔綾の太鼓〕を改作したもので、同一系統のものに〔綾鼓〕がある。いづれも賤しい老人が高貴の御方を恋し奉ったもので、賤しい女が天皇を慕ひ奉った〔花筐〕とともに、懸隔の甚しい恋を描いたもので、謡曲数百番中他に例の少い構想である。ただここに注意したいのは、賤夫の恋の対象に女御を指したことで、今日の我々から見れば、あまりに冒瀆の感に打たれるのであるが、これは必しも皇室式微の室町時代相の反映として、皇室を軽く見奉ったものとのみ見ることは出来ない。室町時代の武士、貴族を憧憬の標的とした彼等は、公家貴族が接近し奉った宮廷を、この世ながらの極楽境と想像し、男子の最高理想は公卿殿上人となること、女子の夢想は天子に直勤し奉ることにあったのである。それで、室町時代文芸のめでたい解決としては、屢〻この理想・夢想を実現させてゐるのであるが、それは憧憬のあらはれであっ

て、必ずしも皇室を離く見奉ったものとはいへないのである。本曲も亦女性の最も地位の高い方として女御を指し、恋の懸隔を誇張しようとした手法で、他意はなかったものと思はれる。殊に本曲は〔綾鼓〕が「あら恨めしや、恨めしの女御やとて、恋の淵にぞ入りにける」と恨み死にに終ってゐるのに反し、これは「葉守の神となりて、千代の影を守らん」と結んでゐるなど、皇室尊崇の念が自然に溢れ出てゐるのである。

脚色は〔綾鼓〕に比べてクセがないだけで、大体同じ形式であるが、恋の難題として、鼓太鼓又は綾鼓を避けて、恋重荷を択んだのは、賢明なやり方であったと思ふ。（因に右記鼓太鼓とあるのは綾太鼓の誤植である。）

次に、野上氏の謡曲全集の、綾鼓と恋重荷とには左記のように書かれている。

㈠　綾鼓の主題の項に、

弄ばれた恋の執念である。卑賤の老人が身に及ばぬ恋をして、その真情を愚弄されたので、憤怒のあまり池水に身を投げ、悪鬼となって愚弄者を責める。綾の鼓が愚弄の道具である。

㈡　演出の項に、

執念物もカケリがなくなると、それだけ切迫した情緒が露出して、或る意味に於いて近代的となり、或る意味に於いて一層戯曲的操作が多分に目立って来る。殊に此の曲は「恋重荷」の如く結末で悪鬼が善神化することなどがなく、戯曲的意向が直進的である。

㈠　恋重荷の主題の項に、

「綾鼓」と同じく弄ばれた恋の執念を主題とするが、「綾鼓」に比して余程緩和された執念で、一度は悪鬼となって女御を責めるけれども、忽ち転心して葉守の神となって永久に姫小松を守護しようと誓ふ。弄びの道具は綾羅錦繡を以って美しく包んだ重石である。それを負うて御苑を百度千度廻らば麗顔を拝ませてやるといふプライズに、心の眩んでゐた庭掃の老人は、恋の持夫にならうと決心したのである。彼は初めから「恋の奴になり果てて亡き世なりと憂からじ」と観念してゐただけに、一念無量の鬼とはなっても、また転心も早いのである。その上、重荷を負はせることも、不合理の恋慕の心を止めようとの意向からであったことも（「綾鼓」にもその意向は幾分示されてはあるが）、この曲の切迫感を緩和するやうに助けてゐる。

㈡　演出の項に、

舞踊として立廻が挿入されてあることも「綾鼓」より切迫感が少い理由を物語ってゐる。―以上謡曲全集

佐成・野上両氏の言のように、恋重荷は綾鼓よりも切迫感が非常に薄められていることは改めていうまでもない。前にも触れた通り、世阿弥の能作態度から見ても、一往は当然と思われるが、現代的感覚から見て果たしてどちらが優っているというべきか。能楽に「鉄輪」がある。能勢氏は能楽源流考に、この鉄輪について、「能本作者註文・古歌謡作者考・異本謡曲作者は作者不明とし、二百十

番謡目録・自家伝抄に世阿弥作としてゐる。曲柄などは世阿弥としては如何にぞやと思ふ所があるが、他に異説もないので、仮りに世阿弥の中に加へた。しかし疑問の作である。」とある。いかにも世阿弥作らしくないが、二百十番謡目録が書かれた時分に既に存在したことは明瞭である。この曲も、最後のところが、「腹立ちや、思ふ夫をば取らであまさへ神々の、責めを蒙る悪鬼の神通通力自在の勢絶えて、力もたよたよと、足弱車の廻り逢ふべき時節を待つべしや。まづこの度は帰るべしと、いふ声ばかりはさだかに聞えいふ声ばかり聞えて姿は目に見えぬ鬼とぞなりにける。目に見えぬ鬼となりにけり。」とあって女の執念が最後まで残っている点は、綾鼓と同趣である。

佐成氏は、この鉄輪を評して、「女が恋慕嫉妬の余り鬼女となつた事を描いたものには、本曲の外に〔葵上〕〔道成寺〕があるが、その一は源氏物語から出たもので、興味が古典文芸の上にあり、他の一は乱拍子の舞が中心となつてゐて、いづれも舞台上の興味が恋慕嫉妬の外に移つてゐるが、この曲の主人公は市井の女性であり、嫉妬の描写にのみ力を尽してゐるから、戯曲的興味が一つに集中して、誠に緊張した曲柄となつてゐる。一体、一段又は二段の劇能とも、脚色としては夢幻能に比べて発達したものであるとはいへ、徒らに舞台面の変化が烈しく、しかもその演出が写実的で、簡素な能舞台に不相応なものが多いのであるが、これは主な舞台が二箇所に局限せられてゐて、殊に第一段は筋を運ぶだけの簡単なものであり、第二段には人形の調伏といひ、鬼女の出現といひ、能楽に適はしい構想で、その怨言も亦真情を吐露した凄怨にして情味のこもつたもので、劇能として佳作の一に挙ぐべき曲であらうと思ふ。」と述べられているが、綾鼓の評と対照して著しい矛盾を感ずる。

佐成氏が謡曲大観を書かれた頃は、皇室に対しては絶対尊崇の時で、今日と大変な違いのあった時だったので、恋重荷への評もあのようなものになったものかと思う。私とても今日でも皇室を尊敬する気持は十分有っている。しかし鉄輪についての批評と並べて見て尠からぬ反発を禁じ得ないのである。

又世阿弥の能楽論に対して私は心から敬服しているのだが、現代の実際から世阿弥一辺到的には服しえぬ点が多少ある。今日の能楽は世阿弥時代そのままのものでなく、随分変って来ていることは誰も認めていることで、時代の反映が生じることは当然だと思う。形式の上からでも、舞台の構造・演者の服装・謡本の仮名遣・謡句の発音だけからでも、その変化は直に窺われ、演出や唯子方などでも非常な変り方があることが推測されるのである。劇能的なものは許される限り劇的な方が見物に感銘を与えるに相違ない。鉄輪のような曲が随分古く作られて今日に及んでいる点からでも察知されよう。だから今日に於いては、恋重荷より綾鼓の方が劇的に優れていると言ってよいと考える。恋重荷が綾鼓よりも緩和されているとか、綾鼓を避けて恋重荷を択んだのは賢明なやり方であるということには全然承服致しがたいのである。

曲名にしても、綾鼓の方が幽玄的で品位があり、恋重荷というのは余りに露骨で卑俗である。或いは恋重荷の方が現代的で而も世阿弥自身がつけた名ではないかと言われるかも知れないが、私にはどうも感服出来ない。

次に恋重荷の詞章内容から検討して見ることとする。

詞章中に、「百度（ももたび）千度（ちたび）とは百度（ひやくど）も千度（せんど）も持ちて廻らば」という言い方は、どうも卑俗的でぎこちない感じがする。又「恋よ恋。わが中空になすな恋。恋には人の死なぬものかは。」の歌も、佐成氏は「当時行はれた俗謡からであらう。」と註されているが、これも卑俗な感がする。「浮寝のみ、三世の契りの満ちてこそ」も不似合の句である。中入後のワキの詞、「言語道断。近頃不便なる事にて候ぞや。総じて恋と申す事は、高き賤しき隔てぬ事にて候へどもさりながら、かの者の恋の心を止めんとの御方便にて、重荷を作つて、上を綾羅錦繍を以て美しく包みて、いかにも軽げに見せて持たせなば、かの者思はんには、かほど軽げなる荷なれども、恋の叶ふまじき故に持たれぬぞと心得、恋の心や止まるべきとの御事にて候処に、賤しき者の悲しさは、これを持ち御庭を廻らば、御姿を見えさせ給はん事を悦び、精力を尽し候へども、もとより重荷なれば持たれぬ事を恨み、歎きてかやうに身を失ひ候事、返す返すも不便にこそ候へ。この由を申し上げうずるにて候。」は、急の段の詞としては、甚だ冗漫である。女御の心遣いを述べたのだが、老夫の執念の表現を著しく弱めている。綾鼓の本文では、僅かに「心を尽し果よとや」の一句があり、かすかに女御の心遣いを含めていると言えば言われるかも知れぬが、これとてもきびしい言い方である。今日の能では、狂言が、女御への恋を断たしめる方便であることを述べるようになっている。この方が恋重荷に比して格段に優っている。恋重荷最後の「恋路の闇に迷ふとも、跡弔はばその恨みは霜か雪か霰か、終には跡も消えぬべしや。これまでぞ姫小松の、葉守の神となりて千代の影をも守らんや、千代の影を守らん。」に至って劇的気分をすっかり減殺してしまっている。佐成氏や野上氏の緩和しているということになるが、そうして世阿弥のよく用いる筆法であるとは言え、私には賛成しかねる。あくまで綾鼓の方が優位と断ずるものである。

附記 印刷に附してから、昭和四十年四月発行の観世流謡本を入手し、恋重荷の本文と謡曲大観の方と照合したところ、一、二違っている点を発見したので訂正しておいた。しかし謡本で漢字になっているところなどは組替が面倒になるので殆どそのままにしておいた。ご諒承願いたい。